近世後期の地域文化と四国遍路　―阿波半田地域を事例に

西　　聡子（市原市教育委員会学芸員）

Local Culture and Shikoku henro during the late modern period
：A Case Study of Handa , Awa Province

Satoko NISHI
Curator , Ichihara Municipal Board Of Education

During the late modern period many people embarked on the Shikoku henro. What were these people looking for religiously? What meaning did the Shikoku henro have as part of the regional culture that people were engaged in? In order to explore such questions, I will look at the life of Sakai Yazo(1808-1892) a merchant in the village of Handa, Mima district, Awa province, and examine the connection between regional culture, in this case Haikai (a type of linked verse) and Sekimon shingaku (a Japanese religious movement founded by Ishida Baigan) and the travels of local people and Yazo along the Shikoku henro. Based on his desire to follow the footsteps of Kobo Daishi, Yazo embarked on the Shikoku henro as act of faith to pray for such things as being cured from illness. The fact that Yazo and the local people confirmed each other`s faith in the regional cultural network that strove to improve oneself through Haikai and Sekimon shingaku is something that we need to focus on. Research thus far has demonstrated that people were aware of the faith in KoboDaishi and that people embarked on the Shikoku henro due to illnesses etc., but the connection between the daily cultural activities and the increased faith due to making the Shikoku pilgrimage has not been made very clear. It is obvious that the faith of Yazo and the people around Handa came about because of the connection with such cultural activities as Haikai and Sekimon Shingaku.

はじめに

近世後期は多くの人々が遍路を行った。各地に残る遍路日記や各寺・家に現存する納札、遍路のさなかに行き倒れた人々に関する記録、諸藩の遍路に関する触れ等は、「困窮人」や「病人」までを含む遍路の存在を示している。こうした多数の遍路の存在は、従来、遍路を行う者・迎える者の「（弘法大師への）篤い信仰心」によるものと説明されてきた[(1)]。これに対して近年の研究では、信仰のみならず、遍路の旅に見られる「観光」・楽しみとしての要素や、狂歌が織り込まれた遍路日記に示された旅人の教養と文化的関心にも光が当てられるようになってきている[(2)]。こうしたことを踏まえると、遍路の旅の背景にある人々の信心と文化的関心との関連性を検討することが必要となってくる。そのためには、遍路の旅・遍路に言及した史料のみを取り上げるのではなく、個々の人々の意識や信心のありようを、日頃を過ごす地域での文化活動やそこでの人的交流と関連づけて、遍路の旅の背景を考察することが求められるのではないだろうか。本稿は、遍路を行う側でもあり、迎える側でもある四国阿波の地域住民の旅と地域文化を個別具体的な事例に即して検討することで、遍路がどのような文化的基盤を背景に行われているのかについて探ってみたい。具体的に取り上げるのは、四国遍路を含め多くの寺社参詣の旅を行った阿波国美馬郡半田村（現、徳島県美馬郡つるぎ町）の商人酒井弥蔵（1808～1892）である。「神仏信仰に熱心だった」[(3)]と言われる弥蔵は、地域の人々と組織した百味講（弘法大師忌日の善通寺の法会に集う講）の世話人を勤めたり、遍路日記を残した人物として知られる。他方で、弥蔵は俳諧・石門心学活動を活発に行い、蔵書や活動の記録も膨大に残した人物としても知られ、本報告の検討にあたりきわめて興味深い人物である。酒井弥蔵を通して、遍路の旅が日常の文化活動や人的交流といかに関連して行われているのかを検討することで、地域文化の営みのなかでの遍路の意味について考察したい[(4)]。

1　阿波半田商人酒井弥蔵の四国霊場への旅

（1）酒井弥蔵と四国霊場巡り

まずは半田村及び酒井弥蔵について確認しておきたい。江戸時代を通じて徳島藩領であった半田村は、吉野川の舟運により撫養・徳島・脇町・池田・祖谷を結ぶ物流の拠点に位置し、在郷町として発達した。半田村には、近世中期頃から台頭した敷地屋系と近世後期頃から台頭した木村系という二系統の有力商人が存在した。漆器・質・酒造・油締・米穀等の主要商品を取り扱い、「半田経済界はこの二系統の商家の寡占状態にあった」[(5)]と言われ、半田村における俳諧や石門心学活動の中心も担っていたと指摘されている（弥蔵はこのどちらの系統にも属さない商人）。半田村の村高は文化10年（1813）447石余、旧高旧領取調帳によると468石余（うち蔵入地37石余、残りは藩家老稲田九郎兵衛ら給人4人の知行地）、家数は安政3年（1856）に368軒、人数は984人である[(6)]。酒井家は「堺屋」と号し、徳島佐古町七丁目の町人堺屋吉左衛門を初代として元禄15年（1702）から半田村に居住した[(7)]。檀那寺は半田口山村にある龍頭山神宮寺（真言宗御室派）である。

弥蔵は文化5年（1808）に堺屋武助の長男として生まれ、祖父・父とともに俳諧を嗜み春耕園農圃という俳号を持つ。大福帳によれば弥蔵の生業は、農業を営み農業生産物の販売（大福帳では「家徳」という項目で記録）を行う傍ら、敷地屋系の有力商人（浜店）を主たる取引相手として吉野川を利用した物資の運送・浜揚げを行っていたり（「運賃」という項目で記録）、主に敷地屋国蔵に「雇れ」て、出張代行・委託販売等を行う（「日雇」という項目で記録）。なお、元治元年（1864・57歳）からは前年に病気をしたことで「運賃」収入が減少し、それに替るものとして易筮による謝金が収入源の一つになる。慶応元年からは従来の細々とした日雇い仕事に替り、敷地屋兵助に「雇れ」、長期間出張するようになる[(8)]。このような生業形態から、弥蔵は豪農・豪商でもなく、「中規模商人」[(9)]と指摘されている。

では、弥蔵の旅の頻度と、そのなかで四国霊場をどのように巡っているのかについて見てみたい。弥蔵が参詣した神社仏閣名を箇条書きにした「参詣覚」（七部現存）[(10)]によると、文政9年（1826・19歳）から明治3年（1870・63歳）までの間に数日に渡る寺社参詣の旅を年2～6回程行い、讃岐や伊予、伊勢、紀伊（高野山）、京都・大坂、安芸・備後、出雲（杵築大社）など様々な所へ赴いている。これは当時の民衆の旅の頻度としては比較的高い方であると考えられる。こうしたなかで居住地半田村から3～5日で往復できる讃岐や伊予・阿波の四国霊場には比較的多く赴いている。「参詣覚」の記述にはどのように表れているのかを見てみたい。

同年（嘉永三年）三月豫讃霊場拝礼
金光山仙龍寺　**由霊山三角寺**　三島大明神　川之江八幡宮　和田浜八幡宮　**琴弾八幡宮**　**七宝山観音寺**　**本山寺宝持院**　**剣五山弥谷寺**　**我拝師山出釈迦寺**　**我拝師山曼荼羅寺**　**医王山甲山寺**　**五岳山善通寺**　象頭山松尾寺　（「神社佛閣参詣覚帳」）

上記は弥蔵が嘉永3年（1850）3月に伊予・讃岐にある寺社・霊場を「拝礼」した記録で、**太字**は四国八十八ヶ所霊場[(11)]である。四国八十八ヶ所以外の寺社も含めて参詣する中で、八十八ヶ所の霊場も参詣していることが分かる。四国霊場をある程度まとめて「順拝」する時には、「讃岐霊場六ヶ処　本山寺　弥谷寺　曼荼羅寺　出釈迦寺　甲山寺　善通寺」（「神社佛閣参詣所覚帳」）や、「西讃霊場五箇所　善通寺　甲山寺　曼荼羅寺開帳　出釈迦寺　弥谷寺」（「神社佛閣参詣覚帳」）と記している。弥蔵にとっての四国遍路は、四国八十八ヶ所のうちのいくつかの霊場をまとめて複数回に渡って巡拝するという形態で行われていた。このようななかで、弥蔵が俳諧を通じて交流した半田商人の「代参」や、商用の「旅」の延長で四国霊場を巡る場合もあった。このことは、遍路と日常の活動との連続性の高さを示しているといえよう。酒井弥蔵をはじめとする四国の地域住民は、遍路と生業や文化活動との関係を理解するという意味で、遍路に関する研究の中で改めて注目すべき考察対象なのである。

（2）四国霊場を巡ることの意味づけ

では弥蔵は、どのような文化的基盤を背景に四国霊場を巡っているのだろうか。注目されるのは、弥蔵が

俳諧によって日々の出来事を綴っている『俳諧雑記』に遍路の旅のことが記されていることである。以下で検討してみよう。天保14年（1843）、半田村大久保岩吉の母　右京（俳号）が遍路の旅に出る時に、次のように述べている。

右京雅君は此たび遍照尊の御跡を慕ひて、四国霊場を巡りしと聞、予も是を久しく望むといへ共、未ダ火宅の離れかたくして、けふや君の門出を見送かく
　霜まれに行杖笠ぞ羨し　　春耕（酒井弥蔵の俳号）　　（『俳諧雑記』巻二）

「右京雅君」から「遍照尊（弘法大師）の御跡を慕ひて四国霊場を巡りしと聞」いた弥蔵も「是を久しく望」んでいたとして「門出を見送」る時に「霜まみれに行杖笠ぞ羨し」という俳句を詠んでいる。弥蔵の念願だった四国霊場巡りが弘法大師の「御跡を慕」うという意味を持っていたことは、「四国八十八ヶ所之内阿波国廿三ヶ所遍路」を行った際の『さくら卯の花旅日記』（弥蔵著、安政5年）にも同様の記述が見られ、阿波国の霊場を巡ることは「高祖大師御修行の御跡を慕」うということに示されている[(12)]。こうした認識は、これまでの研究でも知られているように自明のこととも言えるが、ここで注目されるのは、上記にあるように弥蔵が地域の人と雅号で呼び合う俳諧を通じた交流を基盤に遍路の意味や弘法大師への信心を相互に表明し合っていると考えられる点である。この点をもう少し見てみたい。

弥蔵は地域の人々と弘法大師御影供の際に集う百味講を結成する。弘化4年（1847）3月、弥蔵は讃岐善通寺百味講へ半田村の人々とともに参加した。その旅の記録には次のようにある。

そもそも讃岐の国善通寺は、弘法大師第一の旧跡たる事皆人の知る所にして、その昔より、毎年三月廿一日信心の輩百味飲食を奉ること久し、一度その講中に縁を結ぶ者は真言を授かり、又七色の御宝物を拝し奉りて、ありがたさの数々短き筆には記し難し、誠にこの世の思い出この事にして、現当二世安楽疑いなきということを、人々に進る者也
（中略）
斯講中を結ひて大師の霊場に参詣に赴く事、去年今年両度なり、三月十九日の朝、同行の人々とハ跡や先となり、我は独旅立鳧、爰に内藤氏利刀軒美山なる者、予に参銭を頼ミ、大師の宝前に捧け呉れよとの真義をかんして
　　散る花や人のこゝろも実を結ぶ　　（『散る花の雪の旅日記』）

上記から分かることを2つのポイントに注目して述べたい。一つ目は、正御影供の際の毎年3月21日に「信心の輩百味の飲食を求」め、「現当二世安楽うたかひなきといふ事を人々に進るもの」である善通寺の百味講を半田村の人々と「結」んだことがこの旅の「大師の霊場に参詣に赴く」契機となっていることである。この時の百味講員12名（弥蔵以外）（＝敷地屋国蔵　同兵助　冨右衛門　鹿蔵　坂本屋銀左衛門　同伊代吉　大泉為之丞　大坂屋嘉吉　山口茂八郎　今津や角蔵　川野屋喜兵衛　大久保熊三郎）には、先の右京の例のように、俳諧を通じて弥蔵と交流していることが史料上明らかな人物が5名いる（下線を引いた人物。弥蔵の俳諧日記である『俳諧雑記』『俳諧年行司』より分かる）。このように、百味講という、弘法大師への信心に基づき「現当二世安楽」を願う講に集う人々と、俳諧を通じて交流のある人物には重なりがあるということが確認できるのである。

上記の史料で注目したい二つ目は、旅立ちの時、内藤氏利刀軒美山（半田村住）が参銭（賽銭）を頼んだ際には、「大師の宝前に捧け呉れよとの真義をかんして」弥蔵が俳諧を詠んで出発していることである。ここでも雅号で呼ぶ俳諧の交流を前提として、弘法大師への信心を確認し合っていることが窺えるのである。

以上から、弥蔵はいくつかの霊場を複数回に渡って巡るという形態で四国霊場を巡拝し、俳諧の交流を基盤にして、弘法大師の「御跡を慕」って四国霊場を巡るという遍路の意味を地域の人々と表明し合っていることが分かる。また、百味講の例のように、弘法大師への信心に基づいて集う人々と、俳諧を通じて交流のある人物には重なりがあるということも確認できる。俳諧を通じた地域の人々との交流のありようが、弥蔵や地域の人々の遍路の旅の背景にある文化的基盤を形作っていることが窺えるのである。弥蔵は地域の人々

といかなる交友関係を取り結んでいたのだろうか。

2　半田の地域文化と信心 —俳諧と石門心学を中心に—

（1）俳諧を通じて交流する人々

弥蔵が俳諧を通じてどのような人々と交流していたのかを窺える史料が『俳諧雑記』巻一～三、『俳諧年行司』巻四～一二である（以下、『雑記』巻〇、『年行司』巻〇と略記）。『雑記』『年行司』とは、これまでにも紹介されているように天保5年（1834・27歳）～明治22年（1889・82歳）までの「弥蔵の俳諧日記ともいうべき」もので、「年行事・旅・交友・そして私的記録を含めて、その時々の事柄が述懐や句・狂歌を交えて書かれ」ている[13]。『雑記』『年行司』には、弥蔵と俳句や狂歌を通じて直接やりとりがあった人物が出てくる。紙幅の関係でこれを一人一人挙げることはできないが[14]、総数は171人、うち女性は9人確認できる。人物の居住地は、半田村が一番多く（72人）、中でも半田村の有力商人　敷地屋系と木村系の商人が各14人以上は確認できる。半田村以外に居住する人物については、徳島藩領内では三好郡東井川村（「辻町」）が8人、美馬郡脇町が6人、美馬郡郡里村が4人、美馬郡重清村が4人、三好郡池田村が2人、三好郡清水村が2人、三好郡中ノ庄村が1人、美馬郡貞光村が1人、美馬郡拝原村が1人、麻植郡学村が1人、三好郡昼間村が1人、板野郡西條村が1人確認できる。脇町は、弥蔵の伯父　花山（雅号）も居住しており、脇町で編んだ句集には半田村の俳人も集う（その逆も然り）等、半田村と俳諧を通じたつながりが深いとされている[15]。また、池田・辻・中ノ庄・重清・脇町（井尻）は、弥蔵の「商圏」[16]にある地域であり、さらに清水・貞光・拝原・昼間・学村は、「商圏」にある地と半田村を結ぶ線上かその線上から近い距離にある村である。このような地域の人物は、弥蔵の日常の生業や取引で結ばれる人々であると予想されるのである。人物の身分は徳島藩中老である稲田筑後の「御家臣」が一度登場している[17]が、ほとんどが百姓身分と思われる商人である。

弥蔵の交友関係で目につくのは、半田村に居住する人物との関係である。例えば、雅弘＝敷地屋兵助は、後述するように弥蔵と石門心学の師の墓碑建立の際に「世話人」をし、嘉永7年（1854）から「筆小屋」の師をしていた人物であるが、雅弘の病気が快方した時に弥蔵が酒と句を送っていたり、雅弘の父が亡くなった時には「孝子雅弘雅君の悲涙を推察して」弥蔵が句を送っている。また、弥蔵の俳諧の師であり文化2年の半田村における石門心学の学舎設立の際の出銀者の一人であった孤竹庵梅雅＝木村由蔵や、孤竹庵の嗣子で明治2年に「小高取」格（郷士格に近い格式の百姓で、御目見も許される）となった梅似＝木村総平、弥蔵の「大福帳」において「日雇」の雇い主として多く登場する人物であり安政2年（1855）に徳島藩から親孝行の表彰を受けた敷地屋国蔵、度々家を訪れ合い、「眼疾全快の様子を見て」弥蔵が句を送る等折々に交流した鼡友＝大久保岩吉などは『雑記』『年行司』において度々登場している。これらの人物たちとは、歳旦・端午の節句・月見、2月15日の涅槃会、3月21日の御影供（弘法大師忌日の法会）、4月8日の仏生会、8月15日の放生会、10月12日の芭蕉忌等の年中行事として集い、句を詠み合っている。また、各人物の節目の年齢（初老・不惑・耳順・還暦・古稀等）や、人生の節目となる出来事（病気と平癒、婚姻、「男子出生」、旅立ちの見送り、庄屋役「昇身」など）には句を送り合い、人物が死去した時には複数の人物が集い、追悼・手向けの吟を送っている。このように半田村に居住する人物とは俳諧を通じて頻繁に交流をしている。

こうした交流を通じて、弥蔵は蕉風（正風）の継承者という自己認識を持つに至る。安政五年に、弥蔵は芭蕉からの道統を記す中で、芭蕉に連なる弟子の中に自分を位置付け、「芭蕉翁九世」にあたる道統を有しているという認識を示す記述を残している[18]。蕉風を継承するという意識は、次に述べる半田村における芭蕉塚（句碑）建立の活動を通じて強まったものと思われる。

天保14年、芭蕉150年遠忌にあたり、小野峠にある慈雲閣境内に「雲雀塚」という芭蕉塚が建立された。その時に歌仙を巻いた一人である敷地屋兵助＝雅弘の「年代見聞録」には次のようにある[19]。

> 当卯三月より発起いたし候、弥相決まり候、子細は当村内外風雅一統心願にて峠庵へ芭蕉翁を追尊て塚を建て名を雲雀塚と言・・・(中略)・・・石工は備前国児島久六也、則三月下旬迄成就にて、卯月十二日開眼の後四方雅人同莚に集て、当日俳諧七十二作を修行して手向く、委敷義は農甫志道両君の書蔵に有
>
> 　　発願人　農甫　志道

これによると、雲雀塚の建立は半田村「内外風雅一統」の心願であったこと、弥蔵（農甫）は志道とともに「発願人」であり、当日は「俳諧七十二作を修行して手向」けたこと、「委敷義は農甫志道両君の書蔵に有」とある。実際に酒井家文書にはこの時に弥蔵が作成した『雲雀集』[20]があり、雲雀塚建立の興行の様子や半田村木ノ内・逢坂・小野の三地区の六四名と、脇町等の八名、計七二人（「七十二作」）の句を載せている。この72人の中で『雑記』『年行司』に登場している人物は28人確認できる。

（２）人物評価と俳諧の取り組み・信心

上記のような様々な活動・場面での交流を通じて交友関係を深めていくなかで、婚姻や病気平癒、還暦に際しての俳句のやりとりの中に、人物を評するような言葉が述べられていく。次の史料は天保９年（1838）に何龍（硯渕。半田村住。生没年は不明であるが、弥蔵父の死去に追悼の句を送っている（『雑記』巻1）ことから父と同世代か）が弥蔵（春耕園）の病気快気にあたり俳句を送ったもので、弥蔵が『雑記』巻一に書き留めたものである。

> 春耕園の主人ハ正門に入て平生を能く慎ミけり、はた諸道に進む。その中にも易学に抽して元龍の悔ひ有事を忘れざれば、其功ものにことなりける。母公にハはたちに四ツ余れる孝にまさつて篤敬あり。老母も又獨り子のよふに朝夕思ひけるとなん。実に志しを世に感せざるハなし。然るに仲秋の比より流行の□（疒＋時）□（疒＋役）に取伏られ、終の首途も明やけふやと疎からぬ人々の神仏を祈り、良医を撰び、厚き介抱に助りしと快気の後眉を合せ語りけるに
>
> 野分にハあふた色せず笹の露　　何龍　　（『雑記』巻一）

弥蔵が「流行の□（疒＋時）□（疒＋役）に取伏られ」、「快気」となった際に、「正（蕉）門に入て」俳諧活動を行っている弥蔵の取り組みや、母への「孝」「篤敬」という弥蔵の人格に対する評価が何龍によって述べられている。『雑記』『年行司』にはこのように弥蔵を評している７人の言葉・句と、弥蔵が評している４人への言葉・句が書き留められている。それらによると、弥蔵は「心栄へ正敷賢を尊み・・・風雅に心を澄しける」（梅似＝木村総平からの評価）と評価され、「諸芸に達し中にも俳諧正風の道をもつぱらに修行して楽しむハ世の人の知る所」（松柏堂の評価）であり、「唐倭の書籍に遊び、はた易道に通達し給ひ、実に此人ハ此里の賢人とやいはん、又一村の宝とや言ハん」（如跡＝木村新蔵からの評価）とも評されている。酒井家文書にある俳書・歌書、易学、漢学等の書籍と弥蔵による写本の多さは「唐倭の書籍に遊び」という評価を裏付けるものである。また、多くの句集を筆写・作成したり、芭蕉塚建立への積極的な関与が「俳諧正風の道をもつぱらに修行して楽しむ」という評価につながっているものと考えられる。弥蔵も安政７年に敷地屋国蔵の還暦にあたり、「敷地屋の主じハ、若冠より家業に出情し、財宝乏からず。酒飯に飽満し其余慶に家門の棟梁余多ある。今年還暦の春を迎へるに・・・衣更着や是から先きの日ハ長し　春耕」（『年行司』巻八）との言葉と俳句を送っている。これらのやりとりからは、「家業に出精」しながら「風雅」（俳諧・諸芸・「唐倭の書籍に遊」ぶこと等）に没頭するような、近世の在村文人がめざす業と雅の両立＝業雅両立論[21]にも通じる生き方が、交友の中で意識されていたと見ることができる。

こうしたなかで目を引くのは、上記の引用史料にある何龍の言葉にあるように、弥蔵が「流行の□（疒＋時）□（疒＋役）に取伏られ」た時に、「疎からぬ人々」が神仏に祈って（「良医」や「介抱」の後に）「快気」となったと述べられていることである。地域の人々が弥蔵の病気平癒を神仏に祈る際に、「正門に入て」精力的な俳諧活動を行う弥蔵の取り組みが意識されているのである。弥臓も地域の人の病気平癒に際して同様のことを述べており、梅似の病気平癒に際しては、平癒を「神仏の守護」と考えた弥蔵が梅似に句を「捧」げている（文久元年、『年行司』巻八）。先に半田地域では雅号で呼び合う俳諧・風雅の交流を基盤に弘法大師への信心を確認し合っていることが窺えると述べたが、それは「風雅」（俳諧・諸芸・「唐倭の書籍に遊」ぶこと等）に精力的に取り組む姿勢を重要視する交友関係のなかで神仏への信心を確認し合っているその一つの表れということができよう。

（３）俳諧と石門心学活動

加えて先の何龍の言葉で興味深いのは、弥蔵に対する信頼が、「平生を慎ミ」深い生活を送り母に「孝」を尽くし「篤敬」ありという点にも向けられていることである。次の事例も見てみたい。

里跡雅君ハ若冠より家業に出情し父母に孝行なる人也、今年還暦の春を迎へ志す風流に遊び其祝物のかちんを予も賞翫す、此人の心栄へ廉直なるハ天道に叶ひ金銀有福にて万貫長者と謂べし
正直な人に実はあり花の春　　農甫　　（『年行司』巻十）

これは明治４年、里跡＝木村林右衛門が還暦を迎えた際に弥蔵が送ったものであり、弥蔵が里跡を「家業に出情し父母に孝行」と評し、「正直な人に・・・」という俳句を送っている。「正直」や「慎ミ」「孝」等、いわゆる通俗道徳[22]の徳目の実践が交友の中で意識されていることが窺えるのである。これらの徳目に目を向けた時に注目されるのは、弥蔵が半田村の心学講社根心舎で石門心学にも熱心に取り組んでいたことである。

弥蔵は、自身の石門心学活動について『心学御題控』巻一～五という会輔（心学の修行）の問答記録を残している[23]。『心学御題控』巻一の表紙には「文政十一子十一月」（1828・弥蔵21歳）とあり、巻五には「天保九戊戌二月」（1838）とある。巻五の中を開くと「天保十亥年二月九日答之」という記述があり、その後も八丁続く。おそらくは、『心学御題控』の作成は文政11年～天保10・11年頃であると推定される。中身を開くと、心学の師に対する質問とそれに対する答えというように問答が記され、それらは心学の書物からの抜き書きとも考えられる。『心学御題控』の詳細な分析は今後の課題としたいが、『心学御題控』に見る半田根心舎での会輔には、弥蔵が地域の人々と俳句を詠み合うなかで織り込まれていた諸徳目＝孝行や正直、家業へのつとめ等が問答の中に取り上げられていることが分かる。弥蔵や地域の人々にとって、石門心学的徳目の実践を通じて人格形成をはかる志向性と、「風雅」に精力的に取り組む姿勢を重要視する志向性が一体のものであったということができるのである。

ここで半田村の心学講社根心舎について述べておこう。先行研究によると、半田村に石門心学が普及したきっかけは、半田村の庄屋篠原長久郎が、寛政５年（1793）春、大坂で中井典信（静安舎舎主、堵庵直弟）に入門したことであるという[24]。寛政６年に撫養の里見平兵衛（「上田翁（上田唯今）初入」）・南方の林喜十郎（「手嶋先生直弟」）が来村し、篠原長九郎宅で道話をしたのが半田村における講義のはじまりであった。寛政七年、篠原長九郎は上田唯今（紀州・和歌山の修敬舎舎主、中沢道二に入門）の講話を徳島城下で聴聞し、半田村に彼を招聘した。その時に数十人が入門した。文化元年（1804）、桑原源兵衛（冬夏、貞光村出身）・田村祐之進（備中の人、丹波伝習舎舎主谷川物外の門人）の来村により再び活況を呈し、半田村での石門心学への入門者が増えるに従って心学講舎設立の機運が高まった。そして弥蔵が生まれる約３年前の文化２年２月、36名の出銀者によって半田村木ノ内に根心舎が造立された。徳島県立文書館寄贈大久保家文書にある「根心舎夜驚」[25]（文化２年２月）には、その時の出銀者の名前がある。その中に弥蔵の俳諧の師木村由蔵（「芳蔵」）や、半田村において俳諧の宗匠格でもあったと言われ[26]『雑記』一～三において度々弥蔵と俳諧のやりとりをしていることが確認できる大久保（油屋）十兵衛（一貫斎南香）、そして田村祐之進から講師を認可され、弥蔵の心学の師でもある敷地屋卯平（「路友先生」、1777～1832）がいる。注目されるのは、根心舎において石門心学活動をする人物と、俳諧活動を行う人物には重なりが見られることである。人的な重なりは、その後も見られる。

半田村では天保３年（1832）に没した路友先生の「石碑」（墓碑）建立のために動き出す。弥蔵が著した「路友先生石碑造立控帳」[27]を見ると、石田梅巖・手島堵庵の「流れを汲」む「根心舎の社中三四人ハ」師が没した後、「あんかんとくらす事三ト年」（天保６年）となった。そこで「横田の何某」が言うには「我々師に請し恩ハ須弥よりも高くし報しかたきといへ共」、「せめて石碑を建てしかるべし」と。そこで、人々は「喜び、是ぞ誠に報恩ならむ」として石碑を造立することとなったという。実際に石碑造立が「成就」したのは、「弘化三丙午年（1846）二月下旬」であった。注目されるのは、出銀者として名前のある「根心舎社中」（春田為之助　三宅沢蔵　**敷地屋兵助**　**堺屋弥蔵**　**今津屋角蔵**　綿屋熊三郎　西浦屋善兵衛　大倉彦三郎　三宅熊三郎　三宅沢蔵　中屋忠右衛門　大久保小三郎　**大久保熊三郎**　南馬平　南虎吉　敷地屋長兵衛

敷地屋岩蔵　大坂屋嘉吉　大坂屋雷蔵　**西浦屋吉右衛門**　**敷地屋国蔵**　林勘蔵　いつゝや唯助　門たや幸吉　亀太郎　清水村義蔵妻　世話人　敷地屋兵助　堺屋弥蔵）のうち傍線（波線や太字については後述）を引いた人物は、弥蔵と俳諧を通じて交友のあることが明らかな人物である[28]。ただし、石門心学活動は実名で記し、俳諧活動は俳号で人物名を表記しているため、現段階では俳号・実名両方とも判明している人物の中での重なりということになる[29]。さらに注目されるのは、波線にあるように先述の雲雀塚建立について記していた敷地屋兵助（雅弘）と当の弥蔵が「世話人」をしていることである。敷地屋兵助は、石川謙氏によると京都明倫社の『年中行事記』の記述に「弘化二年三月改」として根心舎の「都講」に掲げられている３人のうちの１人である[30]。また傍線を引いた大久保熊三郎（＝安斎）と、大倉岩次郎（詳細不明）も都講として名前が挙げられている。すなわち、敷地屋兵助や大久保熊三郎のような半田村における石門心学活動の中心人物と、俳諧を通じて交流を行っていた人物には人的な重なりがあるのである。

文化２年の根心舎造立と文化年間初期にできたと言われる半田の俳諧社半田水音分社とはほぼ同時期の活動であるが、俳諧については弥蔵の祖父の時代である天明３年（1783）の脇町井尻の句集に半田の俳人の名が数人確認できるという[31]。このことから、半田地域では俳諧を通じた交友関係を一つの基盤にしながら石門心学活動が展開されていたことが窺える。そして弥蔵は地域における俳諧・石門心学活動の双方とも支えていたのである。

（４）石門心学と信心

ところで、上記の天保６年～弘化３年の「路友先生石碑造立控帳」に見る「根心舎社中」のうち、太字で記した人物は、先述の百味講員として名前が確認できる人物である。実は、石門心学活動を行っていた人物と、百味講に集う人々には、上記の史料上で８人の重なりが確認できる。加えて、石門心学と神仏信仰の関連性に関しては、『心学御題控』に神仏への信心が石門心学の徳目として記されていたり、弘法大師の歌が心学的徳目を表すものとして記されているのである。弥蔵は、遍路に赴く際の弘法大師への敬慕や信心を、信仰の拠り所としつつ石門心学の徳目の中の一つにも位置づけていたといえよう。

最後に、弥蔵や地域の人々が遍路を行う契機や信仰をより強く求める契機には、どのようなことがあったのかについて見ておきたい。嘉永３年（1850）、弥蔵と俳諧や石門心学の活動を共に行っていた半田商人の敷地屋国蔵が「大痢におかされ、已に九死一生に及」んだため、貞光・半田両地区にある八十八ヶ所（現、端四国八十八ヶ所写し霊場）に「三度の心願を掛け」た（弥蔵著『法楽書』）。その結果、「程無く平癒し」たので「御礼の為」に弥蔵が「代参」した。この例からは、病気は遍路（この場合は写し霊場）に赴く一つの大きな契機となったことを示している。また、弥蔵は生涯四人と結婚するが、最初の妻との「不和合」による離縁（天保13年）の際には「大巳貴命を恨ミ奉」と述べ（『雑記』巻一）、３人目の妻が死去した際には「我不運」であると度々述べ、「悲しさの身にうき事の積りてハ神や仏を恨ミやハする」等の狂歌を詠んでいる（『年行司』巻四）。その約３ヶ月後には「家運長久を願」うという意識を強めて讃岐象頭山へ参詣した（同）。これらの例からは、病気や不和、妻死去等の事態に際して信仰を強く意識するとともに、信心したのに叶わなかった、という神仏への「恨ミ」も生じる（しかしながら信心し続ける）ことがあったことが窺える。

病気等を契機に遍路や参詣を行う者が多くいたことは、従来からよく知られている。だがこれまでの遍路研究では、こうした契機に強まる信心が遍路に赴かせる意識として注目を集め、こうした信心と日頃の豊かな文化活動の営みとがどのようにつながり関連し合っているのかが見えにくかったのではないだろうか。弥蔵や半田地域の人々の信心は、病気や不和、妻死去等を契機としながら、俳諧や石門心学等の文化活動の中で醸成されていったことを窺える事例であるといえよう。

おわりに

本稿では、阿波国美馬郡半田村の商人酒井弥蔵を例に、近世後期の四国遍路の旅が地域における俳諧・石門心学活動とそこに見られる交友関係の中でいかに行われていたのかを検討してきた。多くの寺社参詣の旅を行うなかで、いくつかの四国霊場をある程度まとめて巡拝するという形態で四国霊場巡りをしていた弥蔵は、四国霊場巡りの意味について、雅号で呼び合う風雅の交流の中で、弘法大師の「御跡を慕ひ」四国霊場

を巡るということを表明し合っていた。このような弥蔵と地域の人々の俳諧による交流の中では「風雅」（俳諧等）に精力的に取り組む姿勢を重要視するとともに、石門心学的徳目を実践することで人格形成をはかろうとする志向性を重視する交友関係を築いていた。弥蔵や地域の人々は、文化活動を通したこのような交友関係のなかで旅の意味や信心を確認し合いながら四国遍路が行っていたといえよう。今回検討した一事例のように、四国の地域住民が育んだ諸文化が近世の四国遍路を支えていたのではないかと考えるが、今後、様々な事例の検討が必要と考える。

本稿では直接は触れられなかったが、弥蔵は明治25年（1892・85歳）まで生きている。文久2年（1862）8月15日の『年行司』巻九の序文にはこう述べている―「神明仏陀聖賢の教へを守り、天下太平を喜び国主の御恩を忘れず、家業怠り無く勤め、其餘力に風流を楽しむに金烏玉兎の巡りの早き事ハ三五の名の夜哉」。この記述を見ると、「神明仏陀聖賢の教へ」を守ることを信心の拠り所にし、「天下太平を喜び・・・家業怠り無く勤め」る「餘力」に、「風流」（弥蔵の場合、中心は俳諧）に最大限力を発揮して取り組むという（「余力風雅論」[32]にも通じるような）生き方がなおも弥蔵の人格形成にとって重要であったことを示している。また、明治11年と18年の『年行司』に次のような記述がある―「王政御一新にて神仏御取分けなる世なれ共、九月廿五日夜明の夢に　天満宮のお告の歌に　　受らじなあまみつ神の影向ハ両部行ふ人にこそあれ」（明治11年『年行司』巻十一）、「世ハ移り替りて今ハ切支丹　神も仏も無き世かとぞ思ふ」（明治18年『年行司』巻十二）。明治期の弥蔵の意識については今後詳細な検討が必要であるが、弥蔵が長い時間をかけて実践してきた神仏信仰とその継続は、上記に表れている「王政御一新」の世への反発・批判意識の根拠・支点となっていったと展望している。弥蔵は80歳になった明治20年（1887）、妻（63歳）や孫（養子の子12歳）等を連れて「十里拾箇所遍路」を行い、その記録「奉納十里拾箇所遍路同行二人」[33]を残している。

翻って四国遍路史上の幕末・明治期は「四国遍路に対する「排斥論」が吹き荒れた時代」とも言われている[34]。例えば明治5年以後は四国各県の布達で遍路の取り締まり令が出され、新聞の社説等では遍路の排斥を訴える内容が書かれるようになることが知られ、自由民権運動を進めた自由党系の新聞と言われている土陽新聞に掲載された論説「遍路拒斥すべし、乞丐逐攘すべし」（明治19年）に対しては「民権論的色彩に裏打ちされたもの」とした上で、この論説等から「為政者を含めて、旅人あるいは巡礼をむかえる人々の側の心情のなにかが、確実にかわってしまったのだと考えざるをえない」という指摘もある[35]。このような指摘と、本稿で検討した酒井弥蔵を簡単には結びつけて論じられないとは思うが、酒井弥蔵のようないわゆる文明開化には同調しない四国住民・遍路を行う者をどのように位置づけながら、四国遍路史上の幕末・維新期を考察していくかについては、今後の四国遍路研究の課題の一つといえよう。

註

(1) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、1982年）

(2) 胡光「「遍路日記」に見る四国、その内と外と」（愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会『二〇一三年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』2014年）等。なお、旅における信仰と遊楽の結びつきや関連性については近年多くの研究が指摘している（中でも本稿で分析対象にしている酒井弥蔵を取り上げたものに鬼頭尚義「聖地巡礼と「聖地」巡礼―信仰と遊楽の融合―」（『巡礼遍路研究』１．2015年）がある）。本稿は旅に赴いた時とは異なる日常を中心的に扱い信心と文化的関心がいかに関わり合っているのかを検討したい。

(3) 佐藤義勝「酒井弥蔵の俳諧活動と阿波月並句会」（徳島県立文書館『酒井家文書総合調査報告書』1997年）

(4) 主な使用史料は徳島県立文書館寄託酒井家文書と広島県福山市酒井氏蔵酒井家文書である。酒井家文書は、徳島県立文書館に寄託された1804点（文書の整理番号ｻｶｲ00001～01804）と、広島県福山市に居住している所蔵者酒井氏宅に4702点（同ｻｶｲ01805～06506）がある。以下、酒井家文書中にある史料は引用史料の後に史料名を（　）で示す。また、徳島県立文書館寄託大久保家文書、および弥蔵と生業の上でも文化活動の上でも関わりが深い敷地屋兵助の日記（「年代聞見録」、半田町誌1978所収）を補完的に使用する。

(5) 徳島県立文書館「第十一回企画展 酒井家文書総合調査 江戸時代人の楽しみ―旅・俳句・芝居―」（1996年）

(6) 「阿波国村々御高都帳」（『阿波藩民政資料』徳島県物産陳列場、1914年、622頁）、「半田村夫役御改下調帳」（半田町誌出版委員会『半田町誌』上巻、1980年、510頁）等を参照。

(7) ｻｶｲ03252「左海屋系図上」。

(8) 真貝宣光「酒井弥蔵の生業について」（徳島県立文書観『酒井家文書総合調査報告書』、1997年）

(9) 金原祐樹「酒井家文書の法事帳」(『徳島県立文書観研究紀要』3、2002年)

(10) 「参詣覚」とは、表題に「参詣覚」等がつけられた一連のものをここでは便宜的に言っている。徳島県立文書館寄託酒井家文書には以下の七部が現存している。ｻｶｲ00121「讃州象頭山参詣覚」、ｻｶｲ00140「神社佛閣参詣所覚帳」、ｻｶｲ00074「神社佛閣参詣覚」、ｻｶｲ00133「神社佛閣参詣覚」、ｻｶｲ00109「象頭山五岳山参詣覚帳」、ｻｶｲ00073「神社佛閣参詣覚帳」、ｻｶｲ00134「神社佛閣参詣覚帳」。詳しくは拙稿「四国遍路の巡礼地域住民に見る旅の文化」(『旅の文化研究所 研究報告』24、2014年)を参照。

(11) ここで言う八十八ヶ所は、酒井家蔵書にもある『四国偏礼道指南増補大成』(文化12年版)で記されたものに従った。

(12) 『さくら卯の花旅日記』(ｻｶｲ00254)は酒井家文書に現存する11部の「旅日記」のうちの一つであり、俳諧を交え、序文を持ち、紀行文にも通じる性格をもった特徴的な表題を持つ記録である。詳しくは拙稿「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」(『書物・出版と社会変容』20、2016年)を参照。

(13) 佐藤義勝「酒井弥蔵の俳諧活動と阿波月並句会」(徳島県立文書館『酒井家文書総合調査報告書』1997年)

(14) 拙稿「民衆の旅と地域文化」(高橋陽一編『旅と交流に見る近世社会』(清文堂出版、2017年)

(15) 米澤恵一『俳蹟 阿波半田』(自刊、1982年)

(16) 半田町誌出版委員会『半田町誌』下巻(半田町、1981年)354頁を参照。

(17) 天保14年閏9月22日夜、「前田氏(稲田氏家臣)へ君臨」した時に弥蔵が易筮を乞われた(『雑記』巻一)。

(18) ｻｶｲ01075「安政五年(瀧寺奉燈雲園評抜萃写)」

(19) 「年代見聞録」(『半田町誌』別巻(1978年)「兵助日記」として所収)。

(20) ｻｶｲ00381「雲雀集全」

(21) 杉仁『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流』(吉川弘文館、2001年)

(22) 通俗道徳については安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』(青木書店、1974年)。また、拙稿「通俗道徳」、(木村茂光監修、歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』、東京堂出版、2012年)も参照。

(23) ｻｶｲ00145～00148、ｻｶｲ00038「心学御題控」巻一～五

(24) 米沢恵一「半田村根心舎の人たち」上下『ふるさと阿波』91・92、1977年)、同「半田村における石門心学の盛衰」(一～四、『ふるさと阿波』144～146・148、1990～1991年)、名倉佳之「酒井弥蔵と石門心学」『酒井家文書総合調査報告書』1997年)

(25) 徳島県立文書館寄贈大久保家文書ｵｵｸ00311「根心舎夜驚」

(26) 佐藤義勝『近世阿波俳諧史』(航標俳句会、2000年)。また、南香の三回忌に追善句集『菊の手向』(ｻｶｲ00218)が刊行されている。

(27) ｻｶｲ00150「路友先生石碑造立控帳」

(28) このうち、三宅熊三郎(俳号歩雪)は、『雑記』・『俳諧雑記』では名前が確認できないが、半田水音分社三世社長であることが指摘されており(前掲註15米澤書)、嘉永2年の出雲への旅(『出向ふ雲の花の旅』(ｻｶｲ00086)に記録)に同行し、途中句を詠み合っていることが確認できる。

(29) 傍線を引いていない人物についても、弥蔵と俳諧を通じて交友をしていた人物がいる可能性があると考えるが、実名・俳号で各々の活動を区別しているため、同一人物かどうかの特定が難しい。これについては今後の課題としたい。

(30) 石川謙『石門心学史の研究』(岩波書店、1938年、969頁)

(31) 前掲註15米澤書

(32) 前掲註21杉書

(33) ｻｶｲ00763「明治二十年丁亥四月吉日奉納十里拾箇所遍路同行二人」

(34) 浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究 四国遍路の接待文化』(古今書店、2008年)276頁。

(35) 真野俊和『日本遊行宗教論』吉川弘文館、1991年)。なお、真野氏の指摘に関しては、浅川氏が「地域社会の心性が確実に変化したとは即断しないが、真野に倣うならば「たとえ建前であったとしても「大願・心願」に基づく移動が認められ、受け入れられる社会」というものが、ここで保証されなくなったという変化があったことは確かだと思われる」と指摘する(前掲註34浅川書)。